

おばあちゃんはねむい

菟 寄

おばあちゃんはねむい

おばあちゃんはねむい

あかねよる
菟寄

今日は日曜日、友達に誘われて楽しく遊んでいた。家に帰るといつもより元気の無い顔の母に告げられた「今からおばあちゃんちに行くから急いで準備して」と。

車の中で聞かされた。「おばあちゃんが死んでしまう」かも知れないと。私にとっておばあちゃんの印象はあまり良くない。いつも不愛想でおでこに皺を作っていて、暇さえあればゴロゴロしながらテレビを見てばかりいる。そんな人だった。

おばあちゃんは布団の中に潜り親戚や近所の人に囲まれていた。私がゆっくりと部屋の中に入っていくと周りの人が場所を開けてくれた。枕元に座り声をかける。

「おばあちゃん」

目をつむっていたおばあちゃんが私の顔を向いて細い目を開ける

「あたしはいつも眠いんだ、知ってるだろう」

小さい頃、雨の降り始めた昼下がり。外に遊びに行けなくて、家には私とおばあちゃんと2人しかなくて、とても退屈だった。おばあちゃんは居間で横たわりテレビを見ていた。最初にいつ放送されていたのかも分からない古い時代劇。この家にはテレビは1台しかない。主人公はおばあちゃんの背中を揺すりながら言った。

「遊ぼう」

後ろから声をかけたから分からなかったけどおばあちゃんは眠っていたみたい。ゆっくりと目を開けて、ゆっくりと体を起こしてオセロ対決をした。真剣勝負だったはずなのにどっちが勝ったのか、もう覚えていない。勝負が終わるとおばあちゃんはまた横になってテレビを見始めた。時代劇はもうとっくに終わっていて情報番組の料理コーナーが映っていたけど、おばあちゃんはすぐに目をつむって静かに眠ってしまった。

「おばあちゃん、遊ぼう。またオセロで勝負しよう」

私はうつむいて膝の上に涙を落としていた。

「あたしはいつも眠いんだ。昔から寝ることが大好きだったんだ。でも。起こしてくれる声が聞こえる、起こしてくれる人がいるのは幸せなことだってのも知ってる」

初めておばあちゃんの笑顔を見た気がした。

「ありがとう」

おばあちゃんはさらに目を細くして深く眠ってしまった。

「ありがとう。おやすみなさい」